



Title	1. 「JF 日本語教育スタンダード」とその活用
Author(s)	上原, 由美子; Uehara, Yumiko
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 22, 9-27
Issue Date	2019-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73443
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJLIES22_02_uehara.pdf



1. 「JF日本語教育スタンダード」とその活用

上 原 由美子

1. はじめに

「JF日本語教育スタンダード」(以下、JFスタンダード)¹⁾は、国際交流基金によって2010年より公開されている、日本語教育のコースデザイン、授業設計、評価を考えるための枠組みである。公開から8年を経て、国内外の日本語教育の現場で活用が広まるにつれ、「具体的な活用方法が知りたい」「Can-doや評価など個別の内容についてもっと詳しく知りたい」「現場の課題解決につなげるにはどう使ったらいいか」など、具体的な要望や質問も多く聞かれるようになった。

国際交流基金日本語国際センターでは、2018年に、JFスタンダードに関連する3つのウェブサイト(以下、サイト)のリニューアルを行った。リニューアルの目的の一つは、上述のような現場からの声を反映し、JFスタンダードに関する内容を充実させ、よりわかりやすく活用しやすいものとして提供できるようにすることであった。

本稿では、はじめにJFスタンダードの概要と、JFスタンダードに関する現場での疑問や課題を紹介し、次にサイトのリニューアルにおける、JFスタンダードの活用促進を目的とした改善策について述べる。最後にJFスタンダードの活用事例として、スペインでの実践の報告を紹介し、そこから得られる示唆について考察する。

2. JFスタンダードについて

2.1 JFスタンダードの概要

本節では、国際交流基金(2017)およびJFスタンダードのサイトをもとにJFスタンダードの概要について簡単に述べる。

(1) CEFRに基づく枠組み

JFスタンダードは、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)(Council of Europe 2001)の考え方に基づいて開発された。CEFRは2001年にヨーロッパの言語教育・学習・評価の場で共有される枠組みとして発表され、以後、世界でも広く外国語教育や評価の場で利用されている。JFスタンダード

用する能力)、語用能力(ディスコース能力と機能的能力)の3つから構成されると考える。

枝の部分にあたる言語活動は、読む・聞くなどの「受容」、一人で長く話す・書くなどの「産出」、会話や手紙のやりとりなどの「やりとり」の3つに分類されている。さらに、受容・産出・やりとりに分類しにくい「メモやノートをとる」などの言語活動を、受容と産出の両者を仲介する「テキスト」としている。言語能力を効果的に使って言語活動を行うための「方略」は、受容・産出・やりとりの3つの言語活動ごとに示されており、言語能力と言語活動をつなぐ役割をしている。

JFスタンダードの木や枝で表された言語能力の構成要素と言語活動は「カテゴリー」と呼ばれ、例えば「手紙やメールを読む」(受容)、「社交的なやりとりをする」(やりとり)、「文法的正確さ」(言語構造的能力)など53ある²⁾。教育現場で、JFスタンダードの木を活用することにより、授業の目標とする言語活動や、それに必要な言語能力、および評価を具体的に考えたり、教師と学習者がそれらを共有したりすることがしやすくなる。JFスタンダードでは、多様な教育現場に応じて、この木に新しい枝や根を加えたり取り除いたりするなど、柔軟に活用することが大切であると考えている。

(4) 6つのレベルとCan-do

JFスタンダードでは、言語の熟達度を文法や語彙、漢字などの知識の量ではなく、「日本語で何がどれだけできるか」という課題遂行能力をレベル指標にしている。課題遂行能力はCan-do(「～できる」という形式で記述された文)で表され、基礎段階の言語使用者(A1、A2)、自立した言語使用者(B1、B2)、熟達した言語使用者(C1、C2)の6レベルに分けられている。このレベルの基準は、CEFRと共通である。

Can-doは学習目標の設定や学習効果の評価に利用でき、これを使うことで、教師やコーディネーターは実社会のコミュニケーション活動を想定した授業の目標や評価方法が考えやすくなる。学習者は、目標が明確になり日本語の力を自己評価しやすくなる。また教師と学習者間だけでなく、他の人や機関とも熟達度や目標を共有しやすくなる。

(5) Can-doの種類

Can-doは、JFスタンダードの木で示されているように、言語能力を例示する「能力Can-do」と、言語活動を例示する「活動Can-do」「テキスト

Can-do」「方略Can-do」の4種類があり、さらに細かくカテゴリーに分かれている。

また、JFスタンダードが扱うCan-doには、CEFRが提供するCEFR Can-doと、国際交流基金が独自に作成したJF Can-doがある³⁾。CEFR Can-doは汎言語的で抽象性や包括性が高く、各レベルの基準や内容を大局的に捉えたり評価の基準に用いたり他の言語と比較したりする際に利用しやすい。一方、JF Can-doは、日本語の使用場面を想定し、具体的な言語活動を例示したCan-doであり、授業の目標設定をする際などに利用しやすい。以下に、対応するCEFR Can-doとJF Can-doの一例を挙げる（レベル：A1、カテゴリー：共同作業中にやりとりをする（やりとり））。

- CEFR Can-do：人に物事を要求し、人に物事を与えることができる。
- JF Can-do：食卓で、「しょうゆを取ってください」「おかわりをお願いします」など、短い簡単な言葉で頼んだり、ゆっくりとはっきりと話されれば、頼まれたことに対応したりすることができる。

(6) ポートフォリオ

JFスタンダードでは、CEFRと同様に生涯学習を重視しており、継続的な学習を支える方法として、ポートフォリオの利用を提案している。ポートフォリオは、学習者のニーズや目的に合わせて、学習の過程や成果を自分で自由に記録・保存するものであり、学習者はこれを活用することで、日本語の熟達度の自己評価や、学習過程・成果の共有が可能となり、自律的学習能力や学習動機を高めることもできる。JFスタンダードでは、図2に挙げた3つの要素で構成したポートフォリオを提案している。表1はその内容例と説明である。

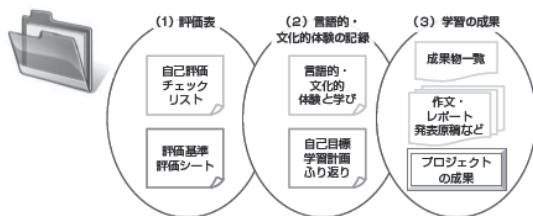


図2 JFスタンダードのポートフォリオの構成

表1 JFスタンダードのポートフォリオの内容例と説明

要 素	内 容 例 と 説 明
評 価 表	●自己評価チェックリスト（学習者が日本語の熟達度をコースのはじめと終わりや途中で確認できるようにしたもの） ●学習活動の評価基準や評価シート（教師からの評価シートだけでなく、自己評価やクラスメートからの評価も含む）
言語的・文化的体験の記録	●言語的・文化的体験と学び（言語的・文化的体験を記録することによって、自分と異なる言語や文化に対する意識を高めることができる。複合的な視野を持ったり、自文化について新しい視点や態度を得たりする異文化理解能力の育成につながる） ●自己目標や学習計画とふり返り（コースを通して、学習者が自分のニーズや興味に応じて目標を立て、実行し、結果をふり返る機会を持つことで、文化知識など言語以外にも含むさまざまな能力や知識について自分で学び続けることができる学習者を育成することにつながる）
学習の成果	●作文、レポート、発表原稿、テスト、プロジェクトの成果物など（書くためのメモ、最初に書いた作文、書き直した作文など書いたものすべてを入れる場合もあれば、自信作を学習者が選んで入れる場合もある。このように集めた学習の成果は次の学習のための素材にもなる）

以上、JFスタンダードの概要について簡単に述べた。詳細については、国際交流基金（2017）、およびJFスタンダードのサイトを参照されたい。

2.2 JFスタンダード準拠教材

JFスタンダードの公開後、これに準拠したさまざまな教材や、口頭能力を測るテストが作成されている。

まず、コースブックである『まるとと 日本のことばと文化』（以下、『まるとと』）が、2013年の「入門（A1）」に続き、「初級1（A2）」、「初級2（A2）」、「初中級（A2／B1）」、「中級1（B1）」、「中級2（B1）」と発行された。『まるとと』は主に海外で学ぶ成人学習者を対象として開発されたが、国内での使用も広がっている。どのレベルでも、知識だけでなく日本語で実際にコミュニケーションすることを目標とし、相互理解を目指した内容となっている。詳細は『まるとと』のサイトを参照されたい。

また、2014年には、ロールプレイを通して口頭でのやりとり能力をA 1からC 1のレベル基準で約15分で判定できる「ロールプレイテスト」が公開された。多言語対応のロールカードなどのテスト用キットをサイトからダウンロードしてそのまま利用できる。

また、4.1の(4)で述べるように、「みんなの教材サイト」というサイトにも、JFスタンダードに準拠した「JFS読解活動集」「JFS B 2教材」⁴⁾が掲載されている。

3. 現場での疑問・課題

本章では、JFスタンダードの活用が進む中で、国内外の現場から直接および間接的に聞かれる、JFスタンダードやその活用方法に関する疑問や課題について、筆者の視点でまとめて記述する。

(1) Can-doについて

2.1で述べたように、Can-doには6レベルあるが、それぞれのレベル感がよくわからないという声が聞かれる。Can-doの記述には、「短い簡単なメールを読んで～」「～ある程度詳しく書くことができる」「～の内容を大まかに理解できる」など、解釈の幅が広い表現が多く用いられており、どの程度のもを「短い簡単な」「ある程度詳しく」「大まかに」などとするのか解釈が一致しにくい。また日本語については、語彙や文法などの言語能力に関してレベルごとにまとめたリストなどがなく、レベル感の共有が難しいことの一つの理由であると考えられる。

さらに、2.1で述べたようにCan-doにはさまざまな種類があり、全体像を把握するのが難しいという声もある。Can-doを活用するためには、あるCan-doが全体の中でどの位置づけにあり、どのように活用できるのか理解する必要がある。使いこなせるようになるまでに時間がかかると言われることもある。

また、現在JFスタンダードが扱うCan-doは、CEFR Can-doが493個、JF Can-doが552個、計1,045個あるが（Can-doサイト「Can-doとは」より）、それでも実際に現場の学習者のニーズや目標に合致するCan-doが見つからないという声もある。特にJF Can-doは状況や活動の記述が具体的であるため、学習者のニーズと完全には一致しないことも多い。その場合、既存のCan-doをアレンジするなどして「MY Can-do」と呼ばれるオリジナルのCan-doを作ることが推奨され、ガイドブックで作り方が紹介されてい

るが（国際交流基金2017：21-24）、「実際に作るのは難しい」「自分が作ったCan-doのレベルが正しいのかよくわからない」などの声も聞かれる。Can-doの問題に関しては、4.1の(1)(2)で再度述べる。

(2) 授業デザイン、活動内容について

課題遂行型の授業では、Can-doで立てた目標を達成するために、具体的にどんな活動をしたらいいのか、例えば、どのぐらいの難易度のどのような内容の読み物を読んだらいいのか、どのような会話ができたらいいのかなど、Can-doを見ただけではわかりにくいという意見もある。また、授業を考える際に、どのような活動をどの順番で行い、どう評価したらいいのか、一連の流れを具体的に知りたいという要望も聞かれる。これに関しては、4.1の(1)(3)で再度述べる。

(3) 評価について

JFスタンダードでは、学習成果の評価は、学習目標および学習内容と一貫性を持たせることが重要であるとしている。学習成果を評価する方法として、「自己評価チェックリスト」や、評価基準に基づいた「評価シート」（以下、ループリック）、ロールプレイによる口頭テスト、学習者が記入する「振り返りシート」、ポートフォリオを活用して学習成果の評価を行う方法などを紹介しているが（国際交流基金2017：44-48）、この中で、特にループリックの作成方法に関する質問をよく受ける。ガイドブックに説明があるが（国際交流基金2017：55-65）、学習目的や内容に合ったループリックの具体例が詳しく知りたいなどの声がある。これに関しては、4.1の(3)で再度述べる。

(4) 言語能力について

JFスタンダードでは、文法や語彙など言語能力（JFスタンダードの木の根の部分）の説明として、「目標達成に必要なとなる語彙・表現・文型などを考えます。（中略）能力Can-doや、既存の教材を参考に、語彙・表現・文型などの言語項目を考えます」（国際交流基金2017：41）と、学習項目の選定についての記述はあるが、具体的な学習内容や方法、特定の教授法や学習理論を示す記述はない⁵⁾。言語活動（JFスタンダードの木の枝の部分）については、Can-doの記述から、ある程度の学習活動のイメージを持つことができるが、言語能力についてはどのレベルで何をどんな方法で学習したらよいかよくわからないという声も聞かれる。また、目標とする言語活動に必要な文型や語彙を学習するだけでは、初級のうちは問題がなくて

も、中級以降で知識や能力が不足し、課題の達成が難しくなるケースがあるという問題も耳にする。この点は、本紀要の小林論文のテーマとも関連する部分である。

(5) 教材について

2.2で述べたように、JFスタンダードに準拠した教材として『まるごと』があり、これを使用することで自然に課題遂行型の授業ができるよう作られている。しかし、さまざまな事情から、従来の教材の使用を継続する現場も多く、「『まるごと』以外の教材を使いながら課題遂行型の授業をすることは可能か、特に文型シラバスの教科書を使う場合、具体的にはどのようにしたらよいか」という質問をよく受ける。5.で紹介する事例のように、教科書の内容をCan-doで目標設定し直したシラバスの作成を提案することがあるが、その方法では当該の教科書で学習項目とされている文型をカバーできない、学習できる文型が少なくなってしまうという悩みも聞かれる。

(6) 異文化理解について

2.1で述べたように、JFスタンダードでは課題遂行能力と異文化理解能力の二つの能力の育成をサポートしている。このうち課題遂行能力に関しては、JFスタンダードの本を用いたコミュニケーションの考え方や、Can-do、コースデザイン、評価などを通じて多くの関連する記述があるが、異文化理解能力の育成に関して直接的な記述があるのは、ポートフォリオの「言語的・文化的体験の記録」に関する箇所に留まっている（国際交流基金2017：26）。授業の中で異文化理解能力の育成につながる活動をどう取り入れたらよいかなど、具体的な例を知りたいという要望もある。これについては、4.1の(4)で触れる。

以上、本章では、JFスタンダードに関する現場での疑問や課題について筆者の視点からまとめて記述した。4.では、このような声に対応したサイトの再構築について述べる。

4. 現場の課題解決に向けたサイトの再構築

国際交流基金には、JFスタンダードに関連するサイトがいくつかあるが、2018年に、作られてから年月が経っていた以下の3つのサイトが同時にリニューアルされた。

- ・「JF日本語教育スタンダード」（以下、スタンダードサイト）

- ・「みんなのCan-doサイト」(以下、Can-doサイト)
- ・「みんなの教材サイト」(以下、教材サイト)

このリニューアルに関しては、より見やすく、探しやすく、動きを軽くするなど、サイト自体の使いやすさの向上を図ることに加え、3.で述べたJFスタンダードに関する現場の疑問や課題の解決につながることを目指し、内容面の再構築も行われた。

4.1 3つのサイトについて

まず、リニューアル以前の3つのサイトについて、それぞれ簡単に説明する。

スタンダードサイトは、JFスタンダードに関する情報を提供しているサイトである。ガイドブック（国際交流基金2017）をはじめ、各種資料、活用事例に関する論文やレポート、ロールプレイテスト（2.2参照）なども掲載されている。

Can-doサイトはCan-doのデータベースとしての機能を持つサイトである。Can-doを検索したり、フォルダに保存したり、自分で作ったCan-doを保存したりすることができる。

教材サイトは、教師の教材作成を支援することを目的としたサイトである。イラストや写真などの素材に加え、ダウンロードしてそのまま使える教材も提供している。ユーザーが自分で作成した教材を投稿することもできる。JFスタンダードの公開以前に作られたサイトであるが、2015年よりJFスタンダードに準拠した教材も少しずつ掲載されている。

以下では、この3つのサイトのリニューアルに際し、JFスタンダードをよりわかりやすく使いやすくする目的で講じられた改善策について、伊藤（2018）、伊藤他（2018）、伊藤・長坂・上原（2019）、長坂（2018）をもとに述べる。

(1) Can-doの具体的な活動例の提示

Can-doサイトにおいて、一部のCan-doに、その活動例となる会話や文章、タスクに関する情報が表示され、活動内容が参照できるようになった。具体的には、そのCan-doを使った活動例が教材サイトやスタンダードサイトの「ロールプレイテスト」ページにある場合は、リンク先に飛べるようになり、『まるごと』にある場合は、本の出典課が示された。これにより、Can-doに対応する活動内容を見て具体的なイメージやレベル感を把握し

たり、授業デザインや教材作成のヒントを得たりすることが可能となった。

(2) Can-do間の関係がわかりやすく

一つのCan-doに対して、関連するCan-do（同じレベルやカテゴリーのCan-doや、対応関係にあるJF Can-doとCEFR Can-doなど）が、Can-doサイトに分かりやすく整理されて提示されるようになった。関係が近いCan-doを見比べることができるようになり、レベル感を把握したり、より目的に合うCan-doを探したり、オリジナルのCan-doや評価表を作成することが容易になった。

(3) 授業の流れとループリックの例の提示

3.の(2)で挙げたような、課題遂行型授業の授業デザインや活動内容が知りたいという声を反映し、授業の流れを例示した「JFS授業案」が教材サイトに掲載された。これは、*A Core Inventory for General English* (North et al. 2010) を参考にして作成されたものである。A 1～B 2の4つのレベルについて、授業の目標となるCan-do、必要な言語項目や能力、利用できる教材、活動の流れ（Can-doの達成を測る「パフォーマンスタスク」を含む）、評価シートとしてループリックの例などが提示されている。例えば、表2は、B 1レベルのループリックの例として提示されているものである。目標となるCan-doは「弁論大会などで、あらかじめ準備してあれば、異文化体験の出来事や感想などを含んだまとまりのある簡単なスピーチをすることができる」というB 1のJF Can-doである。左列上段の「全体」は言語活動（JFスタンダードの木の枝の部分）の評価項目であり、その下の「ことば・表現」から「話し方（なめらかさ）」までは言語能力（同、根の部分）の評価項目である。「できた！」の列に、B 1のCan-doの内容が学習者にわかりやすい表現で記述されており、「できた！」に

表2 ループリックの例（B 1レベル）

	1 もう少し！	2 できた！	3 すばらしい
全 体	☐ 簡単なことばを使った短いスピーチができた。	☐ 簡単だが、わかりやすいスピーチができた。	☐ まとまりのあるわかりやすいスピーチができた。
ことば・表現	☐ 言いたいことは伝えられたが、ことばの数が少なかった。	☐ 発表の内容に合ったことばを使うことができた。	☐ 発表の内容に合わせて、いろいろなことばや表現を使うことができた。

文 法	☐ 文法のまちがいがあって、言いたいことが伝わらないことがあった。/伝わらないことがあったと思う。	☐ ときどき、文法のまちがいもあったが、言いたいことはわかった。/わかってもらえたと思う。	☐ 既に学習した文法は、だいたい正しく使うことができた。/できたと思う。
発 音	☐ ときどき、聞き取りにくい発音があった、聞いている人はわかりにくかった。/わかりにくかったと思う。	☐ ときどき、聞き取りにくい発音があったが、だいたいわかった。/わかってもらえたと思う。	☐ わかりやすい発音で話すことができた。/話すことができたと思う。
構 成	☐ 簡単な文をならべて話した。文と文のつながりや、まとまりはなかった。	☐ 「そして」「しかし」「だから」などを使って、簡単な文を並べ、つながりがあった。	☐ 文の並べ方に工夫があり、シンプルだが構成がはっきりしていた。
話 し 方 (なめらかさ)	☐ 文法やことばをまちがえたとき、少し時間があいたり、言い直したりすることが多かった。	☐ 言い直すことはあったが、まあまなめらかに話せた。	☐ 言い直すことはあったが、全体的になめらかに話せた。
そ の 他	☐ 原稿を読んだ。	☐ メモをときどき見ながら話した。	☐ ほとんどメモを見ないで話した。

https://minnanokyoza.jp/kyozai/material/JLP00003/JFS_Lesson_plan_B1.pdf

チェックが入れば「該当 Can-do が B 1 レベルで達成できた」ことになる。

(4) JF スタンダード準拠教材の充実

リニューアル後の教材サイトで素材を探すときには、活動の種類、トピック、文型・文法から探す以外に、「JFS 教材を探す」という探し方もできるようになった。そこでは、上述の「JFS 授業案」および JF スタンダードに準拠した下記の 2 種類の教材をまとめて見ることができる。

①「JFS B 2 教材」

JF スタンダード準拠教材として初の上級レベル（B 2 レベル）の教材である「JFS B 2 教材」が、リニューアルに合わせて教材サイトで新たに公開された。多技能統合型教材で、4 つのトピックからなるが、必要なトピックだけを取り出して使用することも可能である。日本語力や興味・

関心で個人差が大きい上級学習者の特徴を考慮し、教材としてそのまま使用する以外にも、現場で課題遂行型の授業をデザインする際の参考としても役立つように作成されている（大船他2017）。

②「JFS読解活動集」

「JFS読解活動集」は、Can-doで目標が設定された読解教材である。初級でも、レアリアかそれに近い素材を使って、現実の使用場面に合わせた読解活動ができるのが特徴であり、初級の課題遂行型の読解活動を考えるヒントとなる。A 2 レベルからは、プリタスクやポストタスクなどに、異文化理解につながる活動例も含まれている（上原2017）。

2015年からA 1 レベルが、続いてA 2 レベルが1 か月～2 か月に1 本の頻度で教材サイトの一般投稿欄に掲載されていたが、サイトのリニューアルに合わせて専用のコーナーが設けられ、わかりやすくまとめて提示されるようになった。現在はB 1 レベルの新教材が定期的に掲載されている。

4.2 他の現場での活用事例の充実

リニューアル以前から、国内外のさまざまな現場でJFスタンダードを活用した実践の報告や、参考となる論文などの資料をスタンダードサイトに掲載していたが、「他の現場では実際にどのように活用しているのか、もっと知りたい」という要望があった。そこで、リニューアルにあたり、新たに関連資料を探して追加した。また、探しやすいように「コースデザイン」「授業のデザイン・工夫」「評価」「ポートフォリオ」「異文化理解」「教材作成」「アーティキュレーション」「『まるごと 日本のことばと文化』を使った実践」「JFスタンダードに関する論文・解説・紹介セミナー他」の9つのカテゴリーに整理した。さらに、この中から特に参考になりそうなものを、サイトのトップページでも紹介するコーナーを設け、課題遂行型の授業を実践する教師が参照しやすくした。

4.3 教師同士の情報共有の促進

Can-doサイトと教材サイト共通のマイページが新設され、その中のCan-doフォルダ（自分で選んだ/作成したCan-doを保存するフォルダ）と教材フォルダ（自分で選んだ教材を保存するフォルダ）に公開機能がつき、全ユーザーに公開したり、知り合いだけに限定公開したりできるようになった。フォルダには、フォルダ作成者がメモを書いたり、Can-doと教材

をマッチングして保存したりできるため、これを見た他の教師は、Can-doや教材そのものだけでなく、フォルダ作成者がどのように授業を考えてCan-doや教材を準備したか、意図もあわせて知ることができる。

以上、3つのサイトのリニューアルに合わせ、JFスタンダードがよりわかりやすく、使いやすくなるよう、現場の疑問や課題に対応して講じられた改善策について述べた。

5. スペイン・サラマンカ大学日西文化センターでの活用事例

本章では、JFスタンダードの活用事例の一つとして、加藤（2017）（「CEFR／JF日本語教育スタンダードに準拠した初級（A1～A2）のコースデザイン紹介－『みんなの日本語初級』を使ったスペイン・サラマンカ大学日西文化センターの実践例－」）を紹介する。国内外で広く使用されている『みんなの日本語初級』（スリーエーネットワーク）を教材として使用しながら、課題遂行型授業を行うためにカリキュラムの改編を実施した事例として、広くさまざまな現場の参考になるものと思われる。以下、加藤（2017）の内容の一部を要約して紹介し、そこから得られる示唆について考察する。

5.1 カリキュラム改編について

(1) コースの受講者・シラバス

受講者は、年齢、学習動機、ニーズが多様である。カリキュラム改編以前は、文型シラバスを基本とし、教材は『みんなの日本語初級Ⅰ』と『同Ⅱ』を使用していた。

(2) カリキュラム改編の経緯

CEFRが公開され、JFスタンダードの「相互理解のための日本語」という考え方が徐々に知られるようになって、教員全員がCEFRやJFスタンダードに準拠した日本語教育とはどういうものか共に考える機会を持ち、カリキュラム改編プロジェクトが始まった。課題の達成を軸にしたシラバス作成にあたっては、教材を変えるのではなく、従来使用してきた『みんなの日本語初級』の各課をCan-doで目標設定し直すことにした。

(3) レベル設定

旧カリキュラムでは、レベル設定は文法知識に依拠しており、『みんなの日本語初級』2冊終了で「初級修了」と考えていた。新カリキュラムでは、教科書の課に沿って進むものの、学習目標を「何ができるようになるか」という視点から、CEFR／JFSのレベルに関する資料を参照して設定し直し、『みんなの

日本語初級』2冊終了時にA2後半に達することを目安とした。

(4) Can-doシラバス作成

教員たちが、各課で学ぶ内容をCan-doで表す作業を行った。表3は作成の流れ、表4はそれに対応する実際の作成過程の例である。

表3 Can-do作成の流れ

第一段階	●Can-doを作成する。 本冊の「練習C」、「会話」、「問題」の中の聴解練習や読み物を言語活動の視点から捉え直し、JF Can-doのリストを参照しつつCan-doの形式で書く。
第二段階	●二つのポイントからCan-doを検討する。 ポイント①言語活動が該当レベルに適合しているか ポイント②学習者にとって真正性が感じられる言語活動であるか
第三段階	●Can-doとして採用するかどうかを判断する。

加藤（2017）中の図を改変

表4 Can-do作成の過程の例

第一段階	第14課の「会話」から、「タクシーの運転手に行先を伝え、『あの信号を曲がってください』など簡単な指示を出すことができる」というCan-doを作成した。
第二段階	ポイント①：レベルに適合しているか 第14課の段階は、A2.1（A2前半）レベルを目標に学習している段階である。JF Can-doのA1とA2の記述を参照した結果、自ら道案内をしたり、走行中に指示を出したりすることを求める上記のCan-doはA2.1レベルを超えていると判断した。⇒レベルに適合していない。 ポイント②：学習者にとって真正性が感じられるか 受講者は日本へ行ったことがない者が大半である。初めての日本で一人でタクシーに乗って、走行中の運転手に道順の指示を出す、という行動は現実味に欠ける。⇒真正性が感じられない。
第三段階	以上から、第14課では「会話」からはCan-doを作らないことにした。

加藤（2017）の記述を基に筆者が作成

そして、最終的に第14課では「練習C」などを材料に次の3つのCan-doを作成した。

- 食事時や教室など日常的な場面で、「その塩をとってください」など簡単な言葉で頼んだり、頼まれたことに対応することができる。
- 相手の様子や状況を見て、「窓を開けましょうか」など簡単な言葉で、手伝いを申し出たり、申し出に対応したりすることができる。

- その場にいない人が今何をしているか、他の人に尋ねたり、簡単に答えたりすることができる。

以上の要領で各課のCan-doを定め、シラバスをまとめた。試行をした後、全教員間で授業報告を共有し、問題点を出し合ってCan-doの修正を行った。改善作業は現在も続いている。

なお、出来上がったCan-doから各課の内容を見直すと、文型や語彙、練習問題の中に、Can-doの達成に不必要なもの、関連しないものがあることがわかった。それらについては授業中に扱わないか、ごく簡単な説明に留めるという方針を取った。

(5) 評価

見直しにあたり、学習者が「このコースを通して自分は何ができるようになるのか／なったのか」という目的意識と達成感を感じられることを目指し、「目標－授業－評価」を一貫させるようにした。また、学習者がCEFRの考える「社会で行動する自立した言語使用者」となっていくために、初級の段階から自分の学習を振り返る習慣をつけることを意図し、学習者自身が評価する機会を設けるようにした。

上記2点を基本に見直した結果、まず口頭試験が変わった。授業で扱った活動(Can-do)の達成を測るためのものと位置付け、レベルごとにルーブリックを作成し、全教員で共有して評価するようにした。従来、口頭試験の評価は教員によるばらつきが出やすかったが、基準や評価ポイントを共有することで透明度が高まり、評価もしやすくなった。もう一つの変化は、学習者の自己評価用ツールとして「Can-doチェックリスト」を導入したことである。授業の初めに目標を確認し、最後にチェックするサイクルを作ったことで、学習者にとってその日の学習成果が明確になり、達成感につながっている。

(6) 新カリキュラム導入後の変化と今後の課題

新カリキュラム導入から4年経ち、学習者の大きな変化として、従来よく出ていた「文型や文法をたくさん勉強したが、実際話そうとしても出てこない」などの声が少なくなり、アンケートでは「文法的知識」と同じぐらい「コミュニケーション能力」が向上したという項目へのマークがあった。授業を評して「参加型」「生産的」「楽しい」「インタラクティブ」「活動的」といった言葉も見られるようになった。教員側にも、自分の知識や教科書の内容をただ伝授するのではなく、学習者の目標達成をサポートする役割の意識が生まれるなどの変化が見られた。

今後の課題として、各課のCan-doのレベルや内容、記述方法の検討は継続して行っていく必要がある。作成したCan-doのレベルで適切に判断が難しい場合も多く、再検討して修正や削除に至る場合もあり、現在も全50課分のリストは未だ完成とは言えない。また、漢字の扱いも大きな課題である。現在のシラバスでは、読み書きに関するCan-doの数が少なく、漢字学習は切り離して別の教材を用いて行っている。漢字学習をどう位置付けるか、今一度検討が必要とされている。

5.2 本事例から得られる示唆

以上、JFスタンダードの活用事例として、加藤（2017）の一部を要約して紹介した。3.の(5)で挙げた、文型シラバスの教材を使っている現場で課題遂行型の授業をどう実践したらいいか、という疑問に対して、この実践例は有益な示唆を提供している。文型シラバスの教材を使用しつつ、教員たちがレベルや内容を精査しながら各課の目標となるCan-doを作成してシラバスを作り直し、課題遂行型の授業を実践したことで、コミュニケーションする力の向上を学習者が実感する成果を上げることができた。

また、「課題遂行型の授業では、初級の文型を網羅的に学ぶことは難しい」という問題に対する一つの考え方も示唆されている。このコースでは、5.1の(4)で見たように「Can-doの達成に不必要な文型や語彙は授業中に扱わないか、ごく簡単な説明に止める」という方針を取っている。「初級で学習すべき文型」が所与のものであるという考えから離れ、何をするためにその文型が必要なのか考えた結果であると思われる。

今後の課題とされている二つの点も興味深い。一つは、Can-doの検討と修正を継続すべきだとしている点である。Can-doは一度作ったら終わりというものではなく、学習者の反応や学習成果に合わせて改善していく必要があるが、それが実践を通して実感されたものと思われる。

もう一つの課題とされている、漢字学習の位置づけについては、3.の(4)「言語能力について」で挙げたJFスタンダードの課題とも一致している。言語能力（JFスタンダードの木の根の部分）の位置づけや学習に関することが、JFスタンダードの活用を考える上で、実際に関心の対象となっていることがわかる。

6. まとめ

以上、本稿では、JFスタンダードの概要、および現場での疑問や課題を紹介し、その対応を一つの目的として実施された3つのサイトのリニューアルについて述べ、最後にJFスタンダード活用の一事例を紹介した。

3.で挙げた疑問や課題に対しては、サイトのリニューアルを通し、Can-doを探しやすくしたり、具体例を示す教材などを提供したり、情報共有を進めたりするなど、ある程度の対応ができたと言えるだろう。引き続き、現場での活用が促進されるよう、具体的な活用事例などの共有が進むこと

が期待される。

注：

- 1) 「JF」は、国際交流基金の英語名であるJapan Foundationの略称である。
- 2) JFスタンダードの木の枝や根で示された言語活動と言語能力は、言語によるコミュニケーションについてこれを網羅しようとしたものではなく、言語教育の現場で理解しやすく扱いやすくするための例示である。
- 3) JF Can-doは、A 1 からB 2 レベルの活動Can-doがある。
- 4) 「JFS」はJFスタンダードの略称である。
- 5) JFスタンダード準拠教材である『まるごと』は、言語能力に関して、SLAの知見を取り入れ、インプットとして自然な会話を多く聞き、聞いた文から意味と形式の関係を類推し帰納的な文法学習が行われるようにしたり、インプットに含まれる文法・文型・表現などへの気づきと内容理解が促進できるよう場面状況を示し内容が類推しやすいようにするなど(来嶋他2014)、一定の考え方や方針に基づいて作成されている。

参考文献：

- 伊藤由希子(2018)「日本語教育ニュース 『みんなの教材サイト』全面リニューアル！」日本語教育通信
〈<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/news/201808.html>〉(閲覧日：2018年12月10日)
- 伊藤由希子・上原由美子・長坂水晶(2018)「教師向け素材提供型サイトにおける課題遂行型授業実践への支援—『みんなの教材サイト』再構築での試み—」『2018年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.207-212
- 伊藤由希子・長坂水晶・上原由美子(2019)「教師支援サイトの再構築—『JF日本語教育スタンダードサイト』『みんなのCan-doサイト』『みんなの教材サイト』連携の試み—」『国際交流基金日本語教育紀要』第15号(印刷中)
- 上原由美子(2017)「日本語教育ニュース JF日本語教育スタンダード

に準拠した読解教材『A 1 活動集（読解）』と『A 2 活動集（読解）』」
日本語教育通信

〈<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/news/201707.html>〉（閲覧日：2018年12月10日）

大船ちさと・篠崎摂子・清水まさ子（2017）「B 2（上級）レベルの課題遂行をめざした教材開発—新たな教材像模索の試み—」『2017年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.402-407

加藤さやか（2017）「日本語教育レポート CEFR/JF日本語教育スタンダードに準拠した初級（A 1～A 2）のコースデザイン紹介—『みんなの日本語初級』を使ったスペイン・サラマンカ大学日西文化センターの実践例—」日本語教育通信

〈<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/report/201711.html>〉（閲覧日：2018年12月10日）

来嶋洋美・柴原智代・八田直美（2014）「『まるごと日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号pp.115-129

国際交流基金（2013～2017）『まるごと 日本のことばと文化』（入門～中級2）三修社

国際交流基金（2017）『JF日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』国際交流基金

〈https://jfstandard.jp/pdf/web_whole.pdf〉（閲覧日：2018年12月10日）

JF日本語教育スタンダード 〈<https://jfstandard.jp>〉（閲覧日：2018年12月10日）

スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語 初級Ⅱ第2版』スリーエーネットワーク

長坂水晶（2018）「日本語教育通信 日本語教育ニュース『みんなのCan-do サイト』が新しくなりました！」

〈<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/news/201811.html>〉（閲覧日：2018年12月10日）

まるごと 日本のことばと文化 〈<https://www.marugoto.org>〉（閲覧日：

2018年12月10日)

みんなのCan-do サイト 〈<https://jfstandard.jp/cando>〉 (閲覧日：2018年12月10日)

みんなの教材サイト 〈<https://minnanokyoza.jp>〉 (閲覧日：2018年12月10日)

Council of Europe. (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge University Press.

North, Brian, Angeles Ortega, and Susan Sheehan (2010) *A Core Inventory for General English*, British Council/ EAQUALS

〈https://www.eaquals.org/wp-content/uploads/EAQUALS_British_Council_Core_Curriculum_April2011.pdf〉 (閲覧日：2018年12月10日)

うえはら ゆみこ (国際交流基金日本語国際センター専任講師)